

第3学年〇組 国語科学習指導案

日 時 平成28年〇月〇日 第〇校時
指導者 教 諭 三浦 直行

1 単元名・教材名

「紀行文を楽しもう」 〇夏草『おくのほそ道』から

2 生徒の実態と本単元の意図

(1) 本単元に至るまでの指導の系統

育成すべき国語の能力 【伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項】	学 習 内 容	単元・教材名 (実施時期)	学習活動と関連する他領域等の指導
・古典の一節を引用するなどして、古典に関する簡単な文章を書くこと。 【第3学年 ア(イ)】	・自分たちの生活につながる「論語」の言葉を探し、考えを伝え合うこと。	「今に生きる『論語』を探そう」 ＜3年・4月＞	【読むこと】第3学年 エ ・「論語」を読み、人間、社会などについて考え、自分の意見をもつこと。
・語句の効果的な使い方に注意し、語感を磨き語彙を豊かにすること。 【第3学年 イ(イ)】	・自分の思いを表す語句や表現を工夫して、俳句をつくること。	「一句ひねって 投句しよう」 ＜3年・5月＞	【書くこと】第3学年 ア ・俳句の語句や表現上の工夫の仕方を知り、自分の考えを深めるとともに適切な構成を工夫すること。

(2) 生徒の実態と本単元の意図

生徒と古典作品との関わりは、幼少時の昔話の読み聞かせにまで遡ることができる。また、小学生時の古典の音読や暗唱などを通して、古文独特のリズム感にも親しんでいる。中学校では『竹取物語』や『枕草子』、『平家物語』などの定番教材を学びながら、そこに表れたものの見方や考え方に触れ、登場人物や作者の思いなどを想像し、古典を身近なものにしてきた。しかし、古典に親しんだり理解を深めたりする場面はあれども、日常生活の中に古典で学んだことを生かす場面はそう多くはないのが現状である。

本単元では、日常生活と古典の学習を結び付けることで、古典作品を進んで読み、その世界に親しむ態度を育成することを目標とした。その際、生徒が主体的かつ対話的な学びを通して深い学びにつなげることができるよう、京都・奈良方面の修学旅行において生徒自ら俳諧紀行文を作る活動を設定した。一学期に学んだ俳句の知識を生かし、さらに古典に表現されていることを取り入れることで、国語の授業を離れた場面での生徒の古典作品に対する意識を高めていきたい。

3 単元の目標

- (1) 芭蕉の旅に対する思いを想像しながら『おくのほそ道』を進んで読み、自らの表現に生かそうとしている。
(国語への関心・意欲・態度)
- (2) 歴史的背景を参考にして芭蕉のものの見方や考え方を捉え、自分の考えをもつことができる。
(読むこと)
- (3) 『おくのほそ道』の表現を参考にしなが自分体験したことや伝えたいことを明確にし、俳諧紀行文をつくること。
(書くこと)
- (4) 『おくのほそ道』の背景に注意して読んだり、自ら俳諧紀行文を書くことを通して、古典の世界に親しむことができる。
(伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項)

4 単元の評価規準と学習活動に即した評価規準

	【関】国語への関心・意欲・態度	【読】読むこと	【書】書くこと	【言】言語についての知識・理解・技能
単 元 の 評 価 規 準	・芭蕉の旅に対する思いを想像しながら『おくのほそ道』を進んで読み、自らの表現に生かそうとしている。	・歴史的背景を参考にして芭蕉のものの見方や考え方を捉え、自分の考えをもっている。	・『おくのほそ道』の表現を参考にしながら自分が体験したことや伝えたいことを明確にし、俳諧紀行文をつくっている。	・『おくのほそ道』の背景に注意して読んだり自ら俳諧紀行文を書くことを通して古典の世界に親しんでいる。

学習活動に即した評価規準	①単元の流れを確認し、プリントを参考にしながら『おくのほそ道』を読み進めようとしている。 ②体験したことを書き出し、古文の表現を参考にしながら俳諧紀行文を書こうとしている。	①『おくのほそ道』を読み、芭蕉の思いについての自分の考えを記述している。 ②作品の虚構性に気付き、その効果についての考えを伝え合っている。	①修学旅行で見聞したことや体験したことのメモをもとに、俳諧紀行文を書いている。 ②紀行文に虚構性をもたせ、自分の伝えたい思いを表現している。	①注釈付きの古文を読み、話の内容と背景を理解している。 ②古文の表現を参考にし、俳諧紀行文を書いたり読んだりして、古典の世界に親しんでいる。 ③古文の表現と比べるなどして、古典と自分との関わりを考えている。
--------------	---	--	---	---

5 指導と評価の計画（全5時間）

 は、研究との関連事項

時	学 習 活 動	学 習 内 容	評価規準・評価方法／関連事項
1	○単元の流れと学習課題を確認する。 ○紀行文や俳諧の概要を知る。 ○『おくのほそ道』より「発端」を音読する。 ○芭蕉の旅への思いを読み取る。 ○学習の振り返りをする。	「紀行文を楽しもう」 <u>学習課題</u> 芭蕉の『おくのほそ道』に倣い、俳諧紀行文に挑戦しよう。 ・紀行文 ・松尾芭蕉 ・俳諧の成立段階 ・古文のきまりや訓読の仕方	【読】の① ・取組の観察 ・ノート観察 <u>主体的な学び</u> ・単元計画表 ・実生活と関わりのある学習課題
2	○『おくのほそ道』より「平泉」を音読する。 ○歴史的背景を参考にして、芭蕉が感じたことを考える。 ○繰り返し音読し、古文に読み慣れる。 ○学習の振り返りをする。	・芭蕉の道程や平泉 ・歴史的背景などに注意して古典を読むこと ・古文のきまりや訓読の仕方 ・古典に表れたものの見方や考え方	【関】の① 【言】の① ・取組の観察 ・ノート観察 <u>対話的な学び</u> ・本を通して作者の考えに触れ、自分の考えに生かすこと ・古文注釈テキスト
3	○『曾良随行日記』の記述と「平泉」後半部分を読み比べる。 ○虚構性が認められる部分について、その効果と虚構を入れた理由を考える。 ○学習の振り返りをする。	・歴史的背景などに注意して古典を読み、その世界に親しむこと ・文章を読み比べ、構成や表現の仕方について評価すること	【読】の② 【言】の① ・取組の観察 ・ノート観察 <u>深い学び</u> ・自己の考えを表し、思いを基に創造することに向かうこと
修学旅行	○修学旅行で訪れる場所にどのような見所があるか確認する。 ○印象に残った場所や出来事などを記録する。 ○これまでの学習をいかし、俳句をつくる。		<u>主体的な学び</u> ・見通しをもって粘り強く取り組むこと ・修学旅行のしおり
4	○『おくのほそ道』の表現に倣い、俳諧紀行文を書く。	・紀行文の形式 ・適切な構成の工夫	【関】の② 【書】の① 【言】の②

	○書いた文章を推敲し、清書する。 ○学習の振り返りをする。	・表現の仕方 ・古文の表現を参考にして、古典に親しむこと	・取組の観察 ・ワークシートの観察 ・ノートの観察 深い学び ・言葉で理解したり表現したりしながら自分の思いや考えを広げ深めること ・俳諧紀行文
5	○作品を読み合い、伝わった思いやよいと感じた表現などを確認する。 ○虚構性のある部分について、古文と比べながらその効果を話し合う。 ○芭蕉と自分たちの、旅に対する思いや表現のしかたを比べ考えたことを話し合う。 ○単元の振り返りを行い、学んだことや考えたことなどをノートにまとめる。	・展開の仕方や表現の仕方などについて評価して、自分の表現に役立てること ・表現の仕方や伝わり方 ・ものの見方や考え方を深めること ・古典と自分達との関わりを考え、古典の世界に親しむこと	【書】の② 【言】の③ ・取組の観察 ・作品の観察 ・ノートの観察 対話的な学び ・互いの考えを伝え合い、考えを広げたり、深めたり、高めたりすること 深い学び ・自分が表現した言葉を問い直して、思いや考えを深めること ・俳諧紀行文作品集 主体的な学び ・自分の学びや変容を見取り、評価すること ・国語学習記録の充実

6 資料

①注釈テキスト

『大村はま国語教室3』に掲載の萩原廣道式テキストを参考に作成。古文の右側に現代語訳と補うべき助詞や言葉、左側に読み仮名や歴史的仮名遣い、文法的事項などを書き入れたテキスト。生徒が古文を読みながら、その内容を理解できるように配慮している。

「おくのほそ道」③ 三年 組 番 氏名

以前から 聞いて驚いて いたく を する (中尊寺の)

かねて耳驚かしたる二堂開帳す。経堂は三将の像を

★曾良随日記「経堂は別当留子にて開かず」 (きやうだう)

阿弥陀如来・観世音菩薩・勢至菩薩

残し、光堂は三代の棺を納め、三尊の仏を安置す。

ひかりだう (七種の宝物 金・銀・瑠璃・瑪瑙・(しやこ)・珊瑚)

七宝散り失せて、玉の屏風に破れ、金の柱霜雪にしつぽう (さうせつ)

朽ちて、既に頽廃空虚の草むらとなるべきを、四面 (さうせつ)

今ほもう 荒れはてて何も無い はずのところを

たいはい しめん

(二八八年造宮の輔室) 瓦屋根

新たに囲みて、薨を覆ひて風雨を凌ぎ、しばらく千歳 (せんさい)

(一遠い昔をしのぶ) 記念物 になって いる

の記念とはなれり。 (おほい) (お) (わ)

かたみ (強調)

五月雨の降り残してや光堂

さみだれ

(一この寺の建てられて以後、五百年にわたって年々降り続けてきた五月雨も、ここだけは降り残したのであるうか、今、五月雨けむる空のもとで、光堂は煥然と輝き、かつての光を偲はせていることだ。)



当分の間 千年

(テキスト作成の実際)

ジャストシステム社の日本語ワードプロセッサ「一太郎」で作成したもので、具体的には次のように調整した。

- ・A 4 横 (印刷時に B 4 に拡大)
- ・縦組
- ・余白 各 20 ミリ
- ・字数 51 字 (字間 4%)
- ・行数 44 行 (行間 83%)
- ・標準フォント JS 明朝 9 P

⑤	④	③	②	①	⑤	④	③	②	①
いふものありけり。					今昔竹取の翁と				
(う)					おきな				
がいた					おきな				
(過去)					おきな				

(第2学年『枕草子』テキスト例)

「枕草子」①	一年	組	番氏名
春はあけぼのやうやう白くなりゆく山ぎは			
すこしあかりて、紫だちたる雲のほそくたなびきたる。			
夏は夜月のころはさらなり、闇もなほ、螢の多く			
飛びちがひたる。また、ただ一二つなど、ほのかに			
うち光りて行くもをかし。雨など降るもをかし。			
秋は夕暮れ夕日のさして山の端いと近うなりたる			
に、鳥の寝ぼけ行くどて、三つ三つ二つ三つなど			

- ①・②行目
現代語訳 (傍線部)
補うべき助詞や言葉 (図形△印)
- ③行目
原文 (HGP 教科書体 20 P)
- ④・⑤行目
読み仮名
歴史的仮名遣い (括弧)
文法的事項など (波線と括弧)

②単元計画表

学習の見通しをもたせるために、単元の初めに配付する。右は全ての時間の計画を入れた例だが、学習状況の実態に応じて、途中の目標や計画を生徒自身に記入させることも考えたい。

また、「学んだことや考えたこと」欄の代わりに、学習のてびきとなる事柄を書き込んでおくことも生徒の主体的な学びを助ける上で有効である。学習の振り返りはノートに記入させるようにすると、枠にとらわれずに考えを書ける利点がある。

③修学旅行のしおり

B 5 で作成し、半分に折れるようにした。持ち歩いて、体験したことや感じたこと、思いついた俳句などをメモする。

日付	場所	思い出に残った場所や出来事などを記録し、俳句を作ろう。
日付	場所	思い出に残った場所や出来事などを記録し、俳句を作ろう。

国語「紀行文を楽しもう」	三年	組	番氏名
◎単元の課題 芭蕉の『おくのほそ道』に倣い、俳諧紀行文に挑戦しよう。			
◎学習の流れ			
学習日	主な学習活動	考えたことや学んだこと	
□	□ 芭蕉の『おくのほそ道』の記述と読み比べ、作品の虚構性について考える。		
□	□ 芭蕉の旅への思いを読み取る。		
□	□ 松尾芭蕉『おくのほそ道』より、「平泉」を読む。		
□	□ 歴史的背景などを参考に、芭蕉が感じたことを考える。		
□	□ 「おくのほそ道」に読み慣れる。		
□	□ 「芭蕉随筆」の記述と読み比べ、作品の虚構性について考える。		
□	□ 修学旅行で訪れる場所を調べ、どのような見所があるか確認する。		
□	□ (修学旅行中) 印象に残った場所や出来事などを記録する。		
□	□ (修学旅行中) これまでの学習をいかし、俳句をつくる。		
□	□ 『おくのほそ道』に倣い、俳諧紀行文に挑戦する。(自分の旅を振り返って)		
□	□ 作品を読み合い、楽しむ。		
□	□ 虚構性のある部分について『おくのほそ道』と比べながら、その効果を話し合う。		
□	□ 芭蕉とみんなの、旅に対する思いや表現のしかたについて話し合う。		